フットパス先進地域から学ぶ
「フットパス式まちづくり」に挑戦する地域
―熊本県美里町、大分県臼杵市、滋賀県東近江市の現地調査から―

Field surveys for finding footpath courses in several areas

廣川　祐司、山口　美乃[1]、塩﨑　涼音[1]、久松　実優[1]
Yuji HIROKAWA, Yoshino YAMAGUTI,
Suzune SHIOZAKI, Miyuu HISAMATSU

＜要旨＞
本研究はフットパスを用いたまちづくりの先進地域である熊本県美里町のまちづくり手法である「美里式フットパスづくり」を模倣し、他地域においても美里式フットパスづくりによって、地域活性化を目指す、2つの地域を調査することで、美里式フットパスが「成功」したと評価される理由やその条件について明らかにする、比較研究である。

＜キーワード＞
美里式フットパス、フットパス式まちづくり、地域内連携、交流人口、関係人口

1．はじめに

1.1　本研究の背景

フットパスとは、英国を発祥とする古い街並みや田園風景など、地域のありのままを楽しむことのできる小径である（日本フットパス協会ＨＰ）。近年、このフットパスの活動を通じて地域活性化に取り組んでいる地域が全国的に増えてきている。日本におけるフットパスの広がりは、1990年代後半に東京都町田市におけるNPO法人みどりのゆびの活動と北海道における環境市民団体エコ・ネットワークの活動によって始まる。その後、2009年2月に東京都町田市、山形県長井市、山梨県甲州市、北海道黒松内町の4自治体が発起人となって、日本フットパス協会が設立された。九州におけるフットパスの広がりは、2013年11月に熊本県美里町で開催された「『全国フットパスサミットin美里』地域を元気にする魔法－フットパスはまちをどう変えるか－」（日本フットパス協会と美里町との

[1] 地域創生学群3年生

共催）が契機となった。美里町は2011年から町内でフットパスづくりを始めた九州におけるフットパスづくりの先進地域である。

現在、美里町内には16ものフットパスコースが敷設されている。美里町のフットパスづくりを通した地域活性化策は、「美里町への交流人口の増加」を意図したものである。地域を主役とし、地域全体で歩く人を歓迎するコンセプトの下、美里フットパスのファンを増やし続けている。このような美里町における「フットパスを用いた地域活性化」の方法は「美里式フットパス」（寺村，2015）と言われ、地域活性化の手法の一つとしてモデルとなっている。まち全体で歩く人を歓迎する考え方は、フットパスの発祥の地である英国の「Walkers are Welcome Town（WaW）」（塩路，2018）の取り組み極めて高い類似性を有している。

この「美里式フットパス」づくりの手法を模倣し、他の地域でも地域活性化の取り組みを始める地域が増えてきている。本稿においては、「美里式」を導入している2022年度に「全国フットパスの集い（全国大会）」を実施する予定の大分県臼杵市の取り組みと、これから美里式のフットパスづくりにシフトチェンジしていこうとしている滋賀県東近江市の現状と調査した結果をまずはまとめておくこととする。そのもとで、これら2つの事例地と熊本県美里町とを比較することで、「フットパスづくり」がまちづくり活動と、どのような関係があり、どのような効果が生じるのかなどについて考察し、ある程度汎用性を有する「フットパス式まちづくり」のモデルを提唱することを本論文の目的とする。

1.2「美里式フットパス」の到達点

美里町では、美里フットパス協会が中心となって毎月1回、町内のフットパスコースにて「フットパスの楽しみ方」「地域の歩き方」をPRするためのフットパスイベントを実施している。参加料はガイド料や保険料、昼食、おやつ（休憩代）も含め、1人2,500円である。他地域のフットパスイベントと比較すると、高めの値段設定となっているが、毎回20名の定員をほぼ超過する申し込みがあるという。美里フットパスの特徴は、極めて高いリピート率である。これは、参加者が単に消費者というだけでなく、美里町のファンになっているということである。

美里フットパス協会の事務局機能は、合同会社フットパス研究所（代表:井澤るり子氏、以下研究所）が業務委託を受けて行っている。フットパス研究所は、美里式フットパスを作り上げた美里フットパスの創設期の中心メンバーである井澤るり子氏と濱田孝正氏を中心に立ち上げた、歩く人と地域を結び地域のファンを増やす取り組みを推進し、「歩く文化を創造する」会社である。研究所では、美里町内だけでなく、日本全国に美里式フットパスのノウハウを伝えることを仕事としている。フットパスづくりの指導のために地域に赴いたり、研修を引き受けたりするなどの活動を行っている。美里町の現状は第2章に詳細をまとめるが、当初、美里フットパスが目的としていた「交流人口の増加」は少しずつ達成されてきている。現在は美里フットパスを楽しみに歩きに来てくれる方々に対して、

より滞在時間を長くし、より多くの地域の方々との接点の提供や地域文化を楽しめることのできる仕組みづくりを始めている。これらの取り組みは、フットパスによって美里町を訪れる人が増え、交流人口が増加していたため、その次のステップへと昇華し、単なる地域へ訪れる「お客様」としてではなく、地域のファンとしてより積極的に美里町に関わってもらい、美里町の「関係人口」の一人となってもらうような取り組みであると考える。

JTB 総合研究所「観光用語集」によると、「交流人口とは、その地域を訪れる人々」とされ、その地域に住んでいる人に対する概念である。殊に、訪れる目的は問わず、観光やレジャーのためだけでなく、通勤・通学、買い物、学びのために地域を訪問するという理由でも交流人口とされる。一方、関係人口とは、総務省の「関係人口ポータルサイト」によると、「移住した『定住人口』でもなく、観光に来た『交流人口』でもない、地域と多様に関わる人々」の事を指す。なお関係人口は、単に地域を訪問する交流人口とは異なり、地域外の人材が「地域づくりの担い手」となることが期待されている（図 1）。

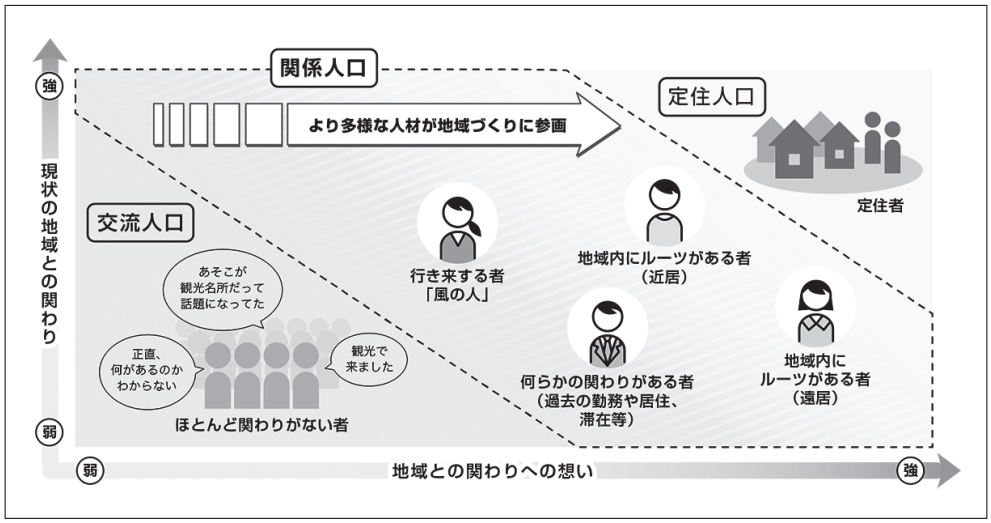

図 1　交流人口と関係人口との違い（総務省関係人口ポータルサイトより引用）

2．熊本県美里町での調査

2.1　調査目的・調査概要

今回 2021 年 8 月 17 日－ 18 日と 11 月 6 日－ 7 日、12 月 4 日－ 6 日の 3 回、フットパスを用いたまちづくりをしている地域のなかで先進地域とされている熊本県美里町へ赴き、調査を行った。美里町は熊本県中心部である熊本市から南東約 30㎞の場所に位置する人口約 1 万人弱の町である。その町で誕生した美里フットパスは 2010 年から始まり、現在ではフットパスコースを 16 コース設けている。町外からも多くの観光客が訪れるフッ

トパスの聖地であり、美里フットパスの地域ブランドを確立している。

このように美里フットパスが地域ブランドを確立できた背景には、地域内連携によって、地域全体でフットパスづくりを展開しているという特徴が大きく関係している。美里フットパスは、美里町役場、商工会、美里フットパス協会、縁側カフェ実施者、小学校、農家、農業協同組合（農協）、飲食店、美里町産業連携協議会などといった、地域内の様々なアクターが、自分たちのできることを明確に役割分担しながら、美里フットパスの運営に携わっている。町内の各種団体が連携することで美里フットパスが、地域を挙げて歩く人を歓迎しているという面的な広がりを想起させるのである（図2）。そのため、美里フットパスでは、すでに固定客となる地域のファンづくりがある程度達成されており、次なる段階への挑戦の時期に来ている。

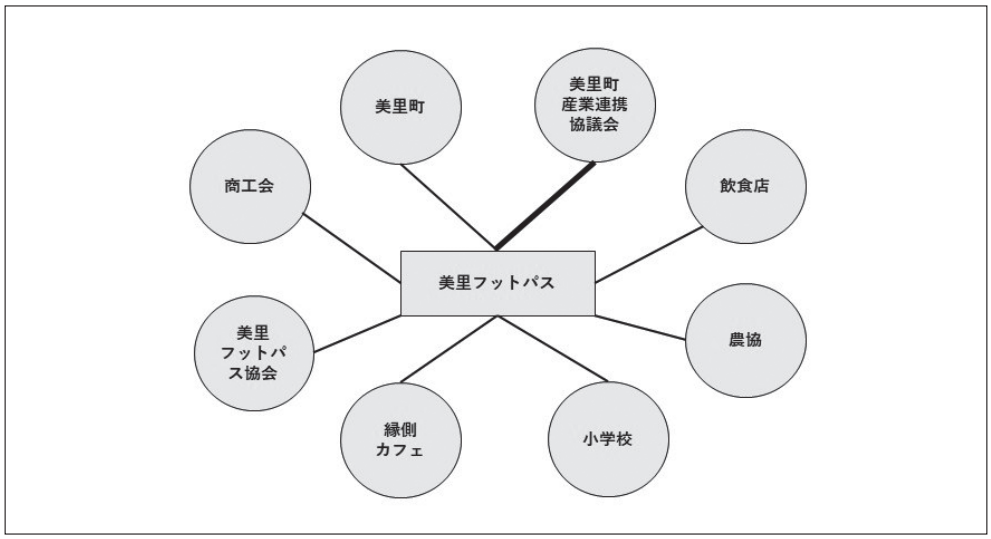

図２　美里フットパスの地域内連携

美里フットパスによって、交流人口の増加という目標をある程度達成された美里町では、次なる段階として、フットパスづくりの際に連携体制を構築できた町内の各種業態の人たちとともに、歩きに来た人たちと直接交流して頂くことで、交流人口を関係人口へと関係性を深めていく取り組みを始めている。そのハブとなる組織が、2016年に設立された美里町産業連携協議会である。今回の調査の重要なカギとなる美里町産業連携協議会（以下、協議会）は美里町の多様な地域資源等を活用した新商品やサービスの開発、販路開拓、町内外への情報発信などといった地域経済活性化の取り組みを促進することを目的とし、情報発信部会、観光部会、民泊部会、商品部会を有した団体である（図3）。ここでポイントとなるのが、単にこれらの様々な取り組みを展開する部会を整え、組織化すれば良いというわけではなく、美里フットパスによって交流人口が増えたため、その来訪者に対して

供給できる新たな商品やサービスの開発をする組織であるという点が重要である。つまり、美里フットパスの「成功」があったからこそ、新たなコミュニティによる新たな活動へと広がることができたのである。

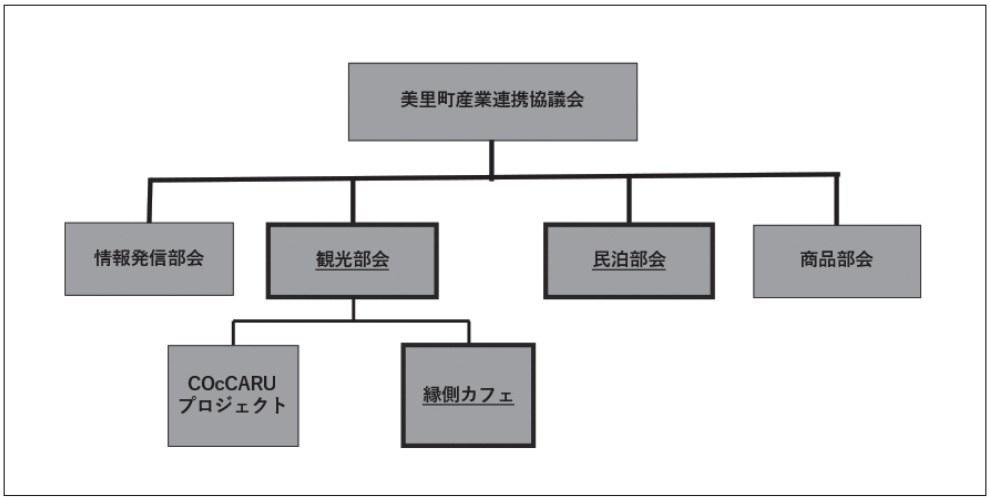

図３　美里町産業連携協議会　組織図

協議会の観光部会では、美里にやってくる来訪者の滞在時間を延ばすための体験型観光について２つの取り組みを始めている。１つ目はCOcCARU（コッカル）プロジェクトである。「美里町の山里を守り、生かし、未来につなぐ」というコンセプトのもと、焚き火拾いから始まり山里の暮らしを伝える「焚き火サイト」や山菜の収穫、出荷、調理といった地域体験ができる「山菜ファーム」など地域資源を使った取り組みを行っている。これらの活動を支えるのは、美里町内の一般の農家や地域のお母さまであり、自分の所有する山林での山菜の収穫や、耕作している田畑での焚火、地元食材を使用した郷土料理づくりなど、地域住民の関わりが無ければ成立しない活動である。また２つ目は縁側カフェである。本活動は、もともと美里フットパスを目的に町内に歩きに来た人をもてなすために始まった取り組みであり、現在では地域の食文化の継承の役割も担いつつある。これまでは、美里フットパスイベントの際に臨時的に地域のお母さま方が地区の公民館などに集まり、実施していたものが、フットパスイベントの無い日でも第２・第４日曜日の10時～14時に常設で美里町内の７か所で縁側カフェを始めている。この縁側カフェも元々は飲食業を営んでいる方ではなく、フットパスイベントの際に縁側カフェを実施していた地域の方が、常設化したものである。

また、上記の取り組みをしている観光部会とは別に、町内での民泊増加に向けた取り組みを行っている民泊部会がある。観光部会と連携しながら、民宿、民泊、農泊の開業に興味がある方を募集し、チラシを全戸配布したり、セミナーの開催を行ったりしている。町

内に存在する空き家や空き部屋を活用しながら、リフォーム等をして、宿泊施設の少ない美里町での「民家への宿泊」を推進している。このように、フットパスの成功事例とされている美里フットパスは、この「美里式フットパス」を活用し、更なる取り組みを展開している。従って、今回の調査目的は、美里フットパスの到達点と「美里式フットパス」を活用した「フットパス式まちづくり」の手法について明らかにすることである。具体的には、交流人口を関係人口化していくための仕掛けづくりについて、美里フットパスと美里町産業連携協議会の取り組みの関連性に注目しながら論を進めていく。

2.2 調査からわかったこと

今回の調査を通して、美里フットパスは交流人口を関係人口化していく段階であるということがわかった。2021 年 12 月 5 日に開催された「お久しぶりの美里フットパス秋 2021」というフットパスイベントでは、参加費 2500 円（会員は 2000 円）という値段設定にもかかわらず、定員に達する約 30 名の参加があった。イベントでは、ガイドのサポートもありながら、大井早そよ風コースを歩き（写真 1）、地域の方とコミュニケーションをとったり、コース内にある椎茸の収穫（写真 2）をしたりなど、地域体験ができる内容だった。

写真１　イベントの様子

写真２　椎茸を収穫している様子

また途中では軽トラを使った縁側カフェが用意されており、地元のお母さんたちが朝から準備してくださった軽食があった（写真 3）。また、最後には収穫した椎茸や美里町のお米などといった美里町の食材を使った手作りの昼食があった（写真 4）。このような体験を踏まえて参加者からは「参加費 2500 円では足りないぐらい貴重な体験だった」「また美里町へ行ってあらたな魅力を知りたい」といった声があり、なかには美里フットパスのリピーターで何度も美里町に足を運んでいる参加者もいた。このような美里フットパスイベントは、このイベントで収益を上げようとしているのではなく、「地域での正しい歩き方」

「地域の食文化などの地域の楽しみ方」を参加者や受け入れている地域の方々に理解してもらうために実施されているというのが特徴的である。このようなフットパスイベントなどを通して、美里フットパスのリピーターになっている参加者も多く、現在ではフットパスイベントを行わずともセルフランブリングをする人も増えている。そして、様々な地域の団体と連携し地域内の多様な方を美里フットパスに巻き込むことで、美里フットパスは魅力を増し、交流人口を増やすことに繋がっている。まさしく、美里フットパスは地域全体で取り組むという「面的な広がり」を見せているといえる。

写真３　軽トラカフェの様子

写真４　昼食

このように美里フットパスは当初の目的である「交流人口を増やすこと」はある程度成功しているという評価を得られている。従って、その次の段階へと目的を昇華させる時期へと来ているのである。つまり「交流人口を関係人口化していく」という段階である。そのために協議会を中心に進めている、農泊推進事業は美里フットパスを歩きに来てくれた人たちを関係人口化するための仕組みであるともいえる。美里町では、フットパスに来てくれた人たちの滞在時間を延ばすため、協議会民泊部会と美里フットパス協会が連携して、農泊を中心とした民宿・民泊を推進している。現在、美里フットパスの知名度の広がりをうけて、美里町のファンが増え、少しずつ滞在時間を延ばし始めているなかで、協議会の民泊部会の役割が関係人口を増やしていく上で、極めて重要な役割を担っているだろう。そこで今回の調査では、協議会民泊部会の呼びかけによって民宿事業を始めた「三千段の民宿　幸登里」と民泊事業を始めた「里山の宿　きつねのてぶくろ」の事例を調査し、その実態を明らかにしておきたい。

◎民宿「幸登里」に訪れて

民宿「三千段の民宿　幸登里」は、協議会から美里町内で全戸配布された民宿募集のチラシを見て、「里山の宿　きつねのてぶくろ」のオーナーと一緒に応募したのがきっかけで始めた民宿である。

調査で気づいたことは民宿や民泊、農泊が、特に地域の食文化という観点から、地域文

化の継承につながっていくのではないかということだ。今回、調査を行った際にオーナーが軽食を用意してくださった。軽食では白菜のお漬物、ブルーベリージャム、梅ジャム、ふかしたサツマイモをいただいた。そこで出された白菜、ブルーベリー、梅は幸登里で採れたものを使っており、お漬物やジャムも自家製で美里町産の食材を味わうことができる機会となった。このように、今回いただいた軽食からでも美里町の食文化を体験することができたことから、民宿や民泊などで出される食事から地域文化の魅力を伝えることが可能ではないかと考えた。またその魅力を伝えていくことによって美里町の食をはじめとした文化を外部へ発信することができ、地域文化の継承につながっていくのではないかと考察した。

◎民泊「きつねのてぶくろ」に宿泊して

また「里山の宿　きつねのてぶくろ」に宿泊して気づいたことは、お客さんとの距離の取り方についてである。きつねのてぶくろのオーナーは自分もお客さんと一緒にお酒や料理を飲んで楽しみたいという思いから、料理や宿泊場所を提供するだけではなく、オーナーもお客さんと一緒にお話したり、ご飯を食べたりしながら、コミュニケーションをとっていた。しかし、民泊で適用される住宅宿泊事業法では食事提供が難しいため、民泊＋食品営業許可を用いて宿泊者と触れ合える民泊の仕組みを作っている。ちなみに、今回の調査でいただいた食事は、開業前ということもあり、試食としてご提供して頂くことができた。

現在は民泊であるが、今後、民泊＋食品営業許可という形を作り出すことで、美里町でとれた食材を使ったご飯を頂きながら、地域の人とのかかわりを生み出せる新しい形になるだろう。それらにより、ホストとゲストのコミュニケーションがとれやすいフットパス＋αのアクティビティになるのではないかと感じた。この民泊制度を利用した、新たな宿泊の形は、旅館業を専門の仕事としている人以外でも、このような宿泊業を営むことができ、空き家や空き部屋を有効活用しながら、来訪者と交流を楽しむことのできる仕組みとして、今後ますます注目に値する取り組みであると感じた。

2.3　調査を通して分かったこと

今回の調査から、美里町は交流人口を関係人口化していく段階にあり、「フットパス＋α（滞在時間を増やす）」という取り組みを展開していることが分かった。フットパスを歩きに来るだけではなく、歩きに来た人に向けてフットパス以外のアクティビティ（民宿や民泊・農泊、COcCARU プロジェクトなど）を通して、美里町の滞在時間を増やしていく段階であり、美里町はフットパス＋αのアクティビティの部分に力を入れ始めている。

今まで美里フットパスの現時点とこれからについて述べてきた。では、美里フットパスを活用した持続可能な地域づくりにはどのような段階が必要なのだろうか。本調査からわかったことして、美里フットパスの段階は大きく分けて3つあると考える。1つ目の段階は、地域資源の発掘である。自分の地域の資源を発掘できるかが重要である。美里フットパス

では、フットパスコース作りの過程のなかで様々な道を歩いたり、まちの人に声をかけることで地域住民からの目を入れたりなど地域全体を巻き込みながら、地域資源を発掘してきた。その過程の中で、町内の様々な関係者との連携を模索し、日常的に行っている役割を来訪者にも提供していくことで来訪者との交流を促すことを大切にしてきたのである。

そして、2つ目の段階は地域の人に理解してもらうことである。フットパスコースを作るだけではなく、地域にフットパスを落とし込んでいく。例えば、定期的なフットパスイベントの開催やそれに伴った縁側カフェの協力など地域の人や外部の人に向けて、フットパスの楽しみ方を発信していく。このような取り組みを繰り返していくことによって、イベントがなくとも自ずと定期的に歩きに来るまちになる。フットパスを特定の観光業者や一部の人たちだけのものにせず、地域の様々な人々や団体を巻き込んで、来訪者への対応に慣れてもらう、そして日常化していってもらうということが必要である。

そして、3つ目の段階は滞在時間の増加に向けたフットパス＋αの取り組みである。この段階は交流人口を関係人口化していくために重要である。実際に地域資源を使った体験ができるCOcCARUプロジェクトや縁側カフェ、民宿や民泊・農泊などの取り組みを行おうとしている。このような取り組みによって、美里町の滞在時間と美里町のファンを増やす仕組みを作っていくことで、美里町の交流人口を関係人口化していくことができているということが、今回の調査を通して気づくことができた。このように美里フットパスでは、様々な取り組みを無理なく長続きさせるために、地域の人が日常的にやっている、できる範囲のことを歩きに来る人たちにも提供して頂き、様々なアクターと連携して行っているからこそ、美里フットパスという地域ブランドが確立し、地域全体で歩く人を歓迎しているという「面的な広がり」をみせているということができる。

３．大分県臼杵市での調査

3.1　調査概要「調査地目的、臼杵市とは（行政情報等）」

本調査は、2021年4月29日－5月1日に実施した。臼杵フットパスは前記した「美里式フットパス」の手法を踏襲し、地域文化の継承や交流人口の増加を目指している。臼杵フットパスは大分県臼杵市に存在するフットパスコースである。大分県臼杵市は、大分県の東海岸に位置し、2005年（平成17年）1月1日 旧臼杵市と旧野津町が合併し、新しい臼杵市となった。市内に13のフットパスコースがあり、また、国宝臼杵石仏がある。その周辺も歩きやすいように道が整備され、マップも存在している。

臼杵フットパスの推進団体は、臼杵フットパス推進実行委員会（以下、推進実行委員会）が存在し､臼杵フットパス研究会と地域振興協議会の2つの組織によって構成されている。また、推進実行委員会とは別に、臼杵市野津町には、吉四六さん村グリーンツーリズム研究会（以下、GT研究会）が存在している。GT研究会とは、平成14（2002）年8月に発足された組織である。発足に至る経緯は、野津町の代名詞でもある吉四六さんの頓智話を

推進する仲間が、吉四六話に興味があり、訪れた方々との夜なべ談義が行われていたことに端を発した。そのように、野津町の農家の人が楽しみながら、また町の活性化に繋げたいという思いから、当時、わずか5軒で発足した。現在では、30軒を越える家庭（2021年聞き取り調査時における数）が会員となっており、国内はもとより海外からも野津町へ訪れる人が増え、農泊体験などを行っている。会の特徴として、運営・活動について、発足から現在まで、ほとんど行政の支援を受けないで行ってきていることが挙げられる。もう一つは、各受入家庭で最も大切にしている"心の交流"によって、多くのリピーターを生み出している点である（NPO法人大分県グリーンツーリズム研究会HP参照）。このように、臼杵フットパスは、臼杵フットパス研究会を中心とする推進実行委員会とGT研究会の2つの組織で進めてられている。

今回の調査では、臼杵フットパスの内、2つの地域で行われているフットパスづくりについて調査した。1つ目は､臼杵市野津町（旧野津町）においてGT研究会が手掛けるフットパスの新コースづくりに対する助言を行うべく美里フットパス協会の井澤氏の活動に同行する形で、調査を行った。GT研究会の会員の案内の下、実際に計画されている新コースを一緒に歩き、その後、井澤氏の講義を受けた後に、新コースの策定に向けた話し合いにも参加した。GT研究会では、地域の良さやおいしい地域の食材、そして郷土料理など、ありのままの良さを感じ楽しんでもらいたいという理念と美里式フットパスの考え方とが一致し、GT研究会では新たな体験メニューの一つとして、会員によるフットパスづくりが開始された。そのため、野津町のフットパスには途中の休憩場所で、地域のお母さまが手作りしたおやつが提供されたり、歩き終えて農泊を体験し、地域で採れた食材を用いた夕食がふるまわれたりするなどした。単に宿泊体験だけではない、地域を楽しめる新たなアクティビティとして、フットパスづくりが始まったのである。

2つ目は、臼杵市内のJR熊崎駅周辺の新コースづくりに関する調査である。このコースは臼杵フットパス研究会のS氏が中心となり、3つのグループに分かれて皆でセルフランブリングによる調査を行った。我々とともに新コース作成をするという視点で、ともに道探し、地域資源探しを行った。その後、スタート・ゴール地点となるJR熊崎駅の駅舎にて、振り返りの実施を行い、新コース案の提案を行った。

調査背景としては、2022年度に大分県臼杵市において全国フットパスの集い（フットパス全国大会）の開催を控えている。しかし、全国大会の開催に向けて臼杵市全体をフットパスで盛り上げていこうとする機運はまだまだこれからのように感じた。その理由としては、旧野津町でフットパスづくりを手掛けるGT研究会と、旧臼杵市街地を中心にフットパスづくりを手掛ける臼杵フットパス研究会とでは、フットパスづくりに取り組む目的に差が生じているためではないだろうか。次節以降、本調査をもとに臼杵フットパスの課題について考察していきたいと思う。

3.2 調査から分かったこと・気づき

野津町では、GT 研究会の方を中心にフットパスに取り組むコアメンバー自身が楽しみ、GT 研究会の会員の活動をよりよくしていこうという意識を持って取り組んでいることがわかった。新コース作成のために歩いている際には、野津町の自然豊かな場所の話やワラビやゼンマイなどを教えていただきながら地域の方々と歩いた。休憩スポットでは、手作りのおやつをいただき（写真 5, 6, 7）、楽しいお話しや再度歩き出す際に「いってらっしゃい」と温かい言葉をかけていただいた。

写真 5　おやつの写真

写真 6　おもてなしの様子

写真 7　GT 研究会食部会の方々との写真

写真 8　夕食時の写真

夕食時間も様々なお話しから楽しい交流の時間を作っていただいた（写真 8, 9, 10）。野津町の皆さんはフットパスの楽しみ方を理解し、地域の連携も強いと感じた。これは、元々取り組んでいた農泊での各受入家庭が最も大切にしてきた「心の交流」がフットパスの取り組みにとても活かされているのだと思う。このように、野津町でのフットパスは野津町を存分に楽しんでもらうための、グリーンツーリズムの新しいアクティビティの一つとして、広がりを見せているといえる。

写真９　夕食の準備の様子

写真 10　夕食の準備の様子

しかし、GT 研究会の特徴でも述べたように、運営・活動について発足から現在まで、ほとんど行政の支援を受けないまま行ってきていることから、臼杵市全体のフットパスに取り組む、推進実行委員会とのつながりが薄い。つまり、GT 研究会は会の発足から極めて独立性が高く、自立している組織であるため、行政と連携し市全体で取り組む一体感が薄く、市報などの行政による広報活動になかなか GT 研究会の活動が取り上げられることが少ないという課題がある。フットパス全国大会に向けての情報発信の際に気をつけることについて話された際に、GT 研究会事務局長の Y 氏は「今後、フットパスという言葉の浸透を臼杵市内に進めるためにも、行政からも発信をしてもらいたい」とおっしゃっていた。

野津町は、元々農泊で培ったノウハウを活かし「心の交流」あるフットパスに取り組んできた、それは自主的に楽しみながら取り組んでおり、内部の組織づくりは上手くいっていると言える。ただ､行政とのつながりが薄く､今後の取り組み方で重要になってくるフットパスの関係人口を地域内部で増やすためには、GT 研究会以外の地域住民との連携や推進実行委員会との連携を強めていくことが必要であることがわかった。

次に、熊崎駅周辺でのセルフランブリングでは、熊崎駅周辺の地域の特徴として、地域の人のオープンな心の魅力がみられた。熊崎駅の駅舎には小学生が描いた絵やおすすめの本などが置かれていたり（写真 11)、オープンガーデン（写真 12，13）があったり、地域側からの歓迎されている感覚を味わうことができた。

写真 11　駅舎内の様子

写真 12　オープンガーデンの様子

写真 13　オープンガーデンの設置看板

また、すれ違った地域の方と楽しくお話しをさせていただいたり（写真 14）、手作りのツリーハウス（写真 15）を登らせていただいたりと、セルフランブリングであったが、地域の方との交流がとても多かった。熊崎駅の駅舎の中には、小学生が描いた絵やおすすめの本など地域で暮らす人の形に触れる機会が多くあり、オープンガーデンも同様に、直接地域の人と会えずとも、間接的に地域の方とコミュニケーションが取ることができるとわかった。

写真 14　すれ違った地域の方とのお話の様子

写真 15　手作りのツリーハウスの様子

フットパスは直接的なコミュニケーションと間接的なコミュニケーションがあることがわかり、今後の新たなコースを作る際には、地域の人々との関係の輪を広げることや今ある魅力を活かしながら工夫することが大切であると思われる。熊崎駅周辺に関して、セルフランブリングの段階であったが、地域の人々は外からきた私たちを受け入れてくれた。このことから、熊崎駅周辺はフットパスコースとしての導線を示すことで、「線的なつながり」をつくりだす可能性がみられた。今後は、段階的な地域住民と日常的な連携が大切である。

3.3 全体を通して分かったこと

大分県臼杵市のフットパスの現状は、地域住民との連携不足と臼杵市全体でのフットパスのブランディング不足であると考えられる。

野津町では、フットパスよりも以前から取り組んでいる農泊から、地域外の人を招く体制は地域内に備わっており、フットパス＋αの取り組みがされている。フットパスをツールとした、地域内の人や食文化、農泊などの資源同士の線的なつながりは行われている。しかし、臼杵フットパス全体としての連携やフットパスのブランディングは行われておらず、面的な広がりにはなっていない。GT 研究会以外の地域内部の住民の方々や、外部との連携が弱く、臼杵市内全体のフットパスづくりを進めている推進実行委員会との連携が薄いと感じられることも懸念事項の一つであると考えられる。

熊崎駅周辺でのセルフランブリングは、臼杵市駅周辺フットパスづくりの初期段階である。そのため、コース上の魅力的なスポットや人々が点状態である。今後のコースづくりの際には、地域の人を巻き込みながら進めていくことが必要になり、線的なつながりを考える必要がある。

今回、調査に訪れた臼杵市内のフットパスコースについて、美里式フットパスと比較すると、臼杵市全体での他業種による「地域内連携」による地域での役割分担が不十分であることが分かる。より各地域同士が連携し、臼杵市全体が共通の目的でフットパスづくりができるようになると面的な広がりに変化していくだろう。

4．滋賀県東近江市での調査

4.1 調査目的・調査概要

本章では、2021 年 8 月 9 日－ 8 月 11 日に調査した東近江市フットパスの事例を取り上げる。本事例地と美里フットパスとの関わりは、2019 年 11 月 16 日・11 月 17 日に滋賀県東近江市において、龍谷大学が幹事校としておこなった「全国カレッジフットパスフォーラム 2019（以下、全国フォーラム）」に始まる。この全国フォーラムに、フットパスネットワーク九州（以下、FNQ）が開催協力をしたことを契機とする。FNQ の議長を務める美里フットパス協会会長の井澤るり子氏が、本全国フォーラムの開催に際し、様々な助言

を行っていたのである。そのため、その後中断を経つつ、美里式フットパスを志向するようになっていくのである。

東近江市とは、平成17年2月11日に八日市・永源寺町・五個荘町・愛東町・湖東町が合併して誕生し、その後、平成18年1月1日に能登川町・蒲生町と合併し、現在の東近江市が誕生した。

今回の調査で私たちは、東近江市の湖東地区と八日市地区の2つの地区を訪れた。東近江市では、行政主体で2017年に当時東近江市役所の「森と水政策課」の担当者であるM氏と龍谷大学の教授が中心となって指導する里山学研究センターの学生団体「みらいの環境を支える龍谷プロジェクト」とが連携して活動を行う形態で、東近江市フットパス活動が開始された。活動内容は、フットパスコース・マップの作成、フットパスイベントの開催が行なわれた。しかし、行政主体で活動を行っていた弊害として、学生が直接取材をした地域のお店をマップに掲載することが認められない等、地域と行政が大学生をサポートするために連動し合って活動していくことが難しい状況にあった。これは、行政として一部のお店のみを掲載することに対する、公平性の観点から、市役所内部で否定的な意見が出たためである。2019年に東近江市で開催された全国フォーラム（写真16）に向けて、東近江市内のフットパスを参加者に体験させるべく、①愛東コース、②奥永源寺コース、③八日市コースが策定されお披露目された。この時にはすでに、各フットパスコースも完成され、フットパスマップも作成されていた。しかし、その後新型コロナウイルスの影響もあり2020年を境に活動は休止状態となっている。その後、東近江市役所職員のM氏のフットパスづくりに対する熱意によって活動は続けられたものの、M氏の退職を機に、この活動は休止した。

写真16　全国カレッジフォーラム2019のチラシ

そのような中2020年冬、湖東地区担当の地域おこし協力隊の方が、湖東地区においてフットパスづくりをしたいという申し出が美里フットパス協会の井澤氏にあった。この動きは東近江市主体で業務として降りてきたものではなく、湖東地区で指定されている地域おこし協力隊のテーマである「健康」によるまちづくりを達成するために、地域おこし協力隊の方がM氏の紹介のもと、井澤氏への申し入れをしたことに始まる。元市職員のM氏も湖東地区のフットパスづくりのサポート役として、湖東地区担当地域おこし協力隊と関わりを持ち、一緒に湖東地区のフットパスづくりを担っている。現在の段階としては、未だに地域の方を巻き込んでつくる段階にはなっておらず、各自で地域資源を調査し発掘し出す段階である。

今回の調査では、M氏を中心とする東近江市と龍谷大学生で作成をした中のひとつである【八日市市街地コース】と、湖東地区担当地域おこし協力隊員が主となって現在作成途中の【池庄・大沢コース（湖東地区）】を調査した。

今回の調査目的は、東近江市におけるフットパス活動の現状の課題とその原因を明らかにすることである。そのために、東近江市でのフットパス活動休止期から現在のフットパスの活動再開に至った背景について述べる。その後、そこから見える東近江市フットパス活動の脆弱性の要因を明らかにするため、ロールモデルとなるために既存の2コースのブラッシュアップを東近江市フットパスを推進する関係者とともに実施した。その中で、どのような経緯で現状に至ったのか、何を考えて、どうしたかったのかなど、当事者の想いを明らかにするため、関係者へのエスノグラフィックインタビューを行なった。

4.2 調査から分かったこと・気づき

今回2つのフットパスコースの調査と関係者へのインタビューを通し、東近江市で行われていた過去と現在（調査当時）のフットパス活動の実態を把握することで、東近江市のフットパス活動における組織づくりに関する課題とその原因を示すことができた。

まず、はじめに、2つのコース調査から気づいたことをまとめる。「八日市市街地コース」の調査からは、八日市の地区の魅力と生活感を味わうことで、コースとしての満足感を実感できた。コース名の通り市街地を歩くことから、地域住民の方とすれ違うことも多く、地域住民になった気分で生活の一部を空間から味わうことができた。路地の狭い住宅地に入り込む小径や歴史を感じることのできる昔ながらの店（写真17，18）、さらには市役所にて郷土産品を購入できるなどお金を落とす場所を創ることのできる場所が用意されているなど、歴史的な商人の町として発展してきたまちの経過を感じることのできるコースとなっている。

また、湖東地区で作成途中の「池庄・大沢コース（湖東地区）」の調査からは、地域住民と直接会うことができなかったために生の声を聞いて愛着を図ることはできなかったものの、景観の豊かさとその景観を支える地域住民の地域への愛着を実感することができた。特に印象的であったのが、田んぼのあぜ道の芝の特徴である。田んぼを眺める（写真19）

と芝の生え方や色の違いから、人工芝と天然芝で分かれていることが確認できる。この人工芝は景観のために地域の農家さんが敷き詰めているため、その場所には地域の池庄町環境保全活動協議会の名で「芝を欠き取るな」の文字が書かれた看板が立ち（写真 20）、雑草の草刈りをしないように来訪者へ呼びかける注意書きがされている。この特徴から、地域方々の地域の景観に対する想いの強さを感じ取ることができた。

写真 17　昔ながらの店「荒物店」

写真 18　昔ながらの店「荒物店」にて店主と話す様子

写真 19　田んぼを眺めながら歩く様子

写真 20 「芝を欠き取るな」の看板

次に、関係者へのインタビューより気づいたことをまとめる。東近江市役所ＯＢのM氏へのインタビューでは、フットパスの位置づけと龍谷大学生との関係性について知ることができた。M氏のフットパス活動歴は約５年で、過去に「森と水政策課」に勤め、エコツーリズムや地域振興について活発に活動されていた。また、フットパスを趣味として位置づけており、その理由として、過去の活動で龍谷大学生が直接取材をした地域のお店をマップに掲載することが認められなかったという行政主体で活動していたからこその弊害が挙げられた。そのため、普段の仕事では融通が利かないことが多く、退職後はフットパスを

趣味として位置づけるようになった。さらに、自由に地域内を歩き回りながら楽しむようなフットパス的な生き方をしていきたいと、フットパスを生活の一部として捉え、フットパスに対する熱意を持っていることも分かった。

龍谷大学生との関係性については、「八日市市街地コース」をはじめとする大学生と共に作成したコースは、学生が主となって作成したものであることが分かった。龍谷大学生の主な活動としては、コースの選定からマップの作成、フットパスイベントの開催であった。コース選定では、フットパス先進地でのヒアリング調査の実施、マップの作成では、デザインからサイズ感や掲載項目までこだわって作成をしている。さらに、来訪者と地域の方とのトラブルを未然に防ぐための、カントリーコードを地域の方と作成も行った。イベントでは、住民の方々と交流をすることで、フットパスの認知とイメージの向上を狙い、学生がガイドを務めた。さらに、参加者とのワークショップも行い、東近江市でのフットパスの輪を広げるきっかけに寄与していたと、M氏は龍谷大学生の活動を高く評価している。

ここでの気づきは、龍谷大学生の場合、コースの選定、マップの作成からガイドといった活動の役割を学生が担い、大学生が中心となってフットパス活動を行っていたということである。そのため、当時フットパス活動を行っていたM氏をはじめとする東近江市の地域の方の位置は、あくまで大学生の活動を支援するアクターであったといえよう。このように、特定の団体のみで活動を進めた場合、何らかの原因によりその団体の活動が難しくなった際、担い手がいなくなり活動は終わってしまう。実際、概要にも記載した通り東近江市では、新型コロナウイルスの影響もあり、2020年を境に龍谷大学生の活動が休止になったことで、東近江市でのフットパス活動は途絶えている。さらに、東近江市には他にも龍谷大学生が手掛けたコースがあり、マップも存在するが、活動が休止状態となっている今、それらのコースは活用されていない。つまり、東近江市でのフットパス活動は、龍谷大学生の活動が休止したことにより、休止したのである。

このことから、龍谷大学生が多くの役割を担っていたために、地域内での役割分担ができていなかったということが分かった。つまり、特定の団体の何らかのフットパス活動において担い手づくりが重要であるのだ。

続いて湖東地区で開始したフットパスの「池庄・大沢コース」作成に携わる地域おこし協力隊員（以下、N氏）へのインタビューでは、現在の東近江市のフットパス活動の現状について知ることができた。N氏は自然に対する愛着が強く、東近江市の自然に惹かれ移住してきた。地域おこし協力隊に所属して2年目(調査当時)で、地域おこし協力隊の中で複数の業務を担っており、その活動のひとつにフットパス活動が当てはまる。はじまりは、地域おこし協力隊のテーマが「健康」であったことであった。テーマに合わせてできることを試行錯誤する中で、東近江市湖東地区の魅力は自然であり、自然を楽しみながら歩くことは健康につながる効果があると思い、「フットパス」の仕組みを知り、2020年冬頃にフットパス活動を開始するに至った。しかしながら、N氏いわく湖東地区の地域の方

は内向き傾向な方が多く、共にコースを作成している地域の方はサポート役のM氏を除く2名のみという現状にあるという。

このように、現在の東近江市では、地域おこし協力隊のN氏が1人でフットパスづくりを再開したという特徴がある。これは、まだ少数ではあるが、美里町のフットパスのはじまりのきっかけである興味を持った人たちのみがまずは集まり活動を始めたことを考えると、初期の段階では未だ評価することはできない段階であろう。

さらに、フットパス活動の経験と熱意を持つM氏がフットパスの再スタートを切った地域おこし協力隊員のN氏とつながったことで八日市地区の住民であるM氏が湖東地区の住民であるN氏へアドバイスをする形で活動ができていることは、地区を超えた情報共有ができているという点で、とても良い事であると感じる。このような休止期間を経て、再度東近江市においてフットパスづくりが再スタートできた背景には、フットパスに魅了されたM氏が市役所という組織的な縛りから解放されたことによって、個人的なつながりの中で新たなネットワークが構築できているからではないだろうか。しかしながら、懸念される課題も存在する。それは、湖東地区でも八日市市街地コースのように地域にフットパスを定着することができない状況に陥るのではないかという、危険性があるということだ。N氏が所属する地域おこし協力隊には任期がある。湖東地区のフットパスコースはまだ、魅力的な地域資源を発掘する段階である。それにもかかわらず、フットパス活動に対する地域の認知度が低く、フットパスづくりの活動に地域の住民の方々を巻き込めていないのが現状である。このままでは、新たに作成しようとしている湖東地区のフットパスづくりは、以前、龍谷大学生を中心に作り上げた「八日市市街地コース」のように、地域の中にフットパスの担い手がいなくなり、中心人物が何かしらの要因によって地域に携われなくなってしまった瞬間、フットパス活動が再度停止してしまうことが懸念される。

4.3 全体を通して分かったこと

滋賀県東近江市のフットパス活動の現状から、地域内部の役割分担といった担い手づくりの重要性と活動の継続によるフットパスの周知の重要性が明らかとなった。今回、訪れた調査地である東近江市湖東地区のフットパスコースについて、「美里式フットパス」づくりの段階に当てはめると以下のようになると考えられる。

東近江市ではフットパス活動が行なわれていた過去があるため、フットパス活動の土台は形成されているといえるだろう。しかしながら湖東地区は現在、コースづくりの途中段階で、メインアクターは地域おこし協力隊のN氏と過去に市役所ＯＢのM氏の2名である。現状ではこれら2名の熱意によって再スタートされたフットパスづくりではあるが、個人として活動されているため、地域全体を巻き込むような組織だった活動が展開できない。コースづくりには、魅力的な地域資源の発掘のために、まずは地域を知ることが必要不可欠である。しかし、外部からやってきた人が地域の歴史や文化を深く理解することは、1人では困難であり、地域の方々との協業体制を構築する必要があるのだろう。本事例は未

だその段階に到達することはできておらず、スタートラインに立ったばかりだといえる。地域に点在する地域資源を発掘するということ、そしてそれを担っているのが個人的な活動であることから、東近江市フットパスは「点」的な活動として始まり、線的な広がりを目指していく段階なのだろう。

一方、熊本県美里町では、地域内部に存在する組織が連携し合い、連携が密にできる仕組みが形成されているからこそ、面的な広がりをもち、大分県臼杵市では組織同士の連携は薄いものの、組織と組織をつなぐ線的な広がりをもつ。この2地域の特徴に対し、東近江市は、フットパスに魅了された方が個人的にフットパスづくりを行っており、点として動き始めたばかりである。コースに関しても地域内の連携が薄いため点と点を巡るコースづくりをしており、点状態であるために広がりも見いだせていない状態であることが分かった。

したがって、フットパスづくりにおいては、地域に存在する魅力的な地域資源の発掘、その資源に物語をつけ、魅力的なものとして巡る事の出来るコースの提示、そしてその場に存在する魅力的な地域住民との交流など、「点」を「線」化していく取り組みが必要となるであろう。その多数の線が、他業種との連携や地区を超えた取り組みとして地域内に広がるこことで、フットパス活動は「面的」な広がりを見せる。地域を挙げて、歩く人を歓迎するまちとなるための道のりは長いと感じた。しかし、本事例と他の「美里式フットパス」導入地域との比較をすることによって、「フットパス式まちづくり」は、どのように始めるべきなのか、その際の注意すべき点などについて、明らかにすることができたことは非常に大きな成果であったと考えている。

5．おわりに

5.1 「美里式フットパス」を取り入れる地域の実情

フットパスの先進地域である熊本県美里町の手法を取り入れ、地域の活性化に取り組もうとしている地域は全国で散見される。しかし、フットパスコースを作ることと、地域活性化を達成するまちづくり活動とは、必ずしも一致しないということは、これまでの調査事例を見れば明らかであろう。つまり、「フットパス式まちづくり」というものは、第4章で書かれているように、地域はそこに住まう地域の方々のものであるという認識の下、地域の生活空間を「歩かせて頂く」という視点が必要なのである。具体的には、「地域の方の理解を得ながらフットパスコースを作ること」、「交流人口の増加というフットパスコースづくりの目的を地域の方々と共有すること」、「地域内の様々な団体や人々と明確な役割分担をし、できることをできる人が担って、地域全体で歩く人を歓迎するフットパスとすること」などが極めて重要な要素であるといえる。これらの考え方を地域の皆さんで共有し、歩きに来る人を歓迎する町として、地域全体でフットパスづくりに取り組むことこそ、美里町から学ぶ「フットパス式まちづくり」が地域活性化の手法として効果を上げ

るための条件であると考える。

そのため、今回の調査では、美里式フットパスを取り入れる地域では、次のような段階を経る必要があることがわかってきた。まずは、第4章の滋賀県東近江市の事例からの気づきである。

東近江市でのフットパスづくりは、外部の大学生と地元の行政との連携によって始まった活動であるが、地域側はあくまでこれらの主体に協力する形での連携であったように感じている。大学生が何らかの事情で地域に来られなくなった場合、行政の担当者が異動や退職でいなくなった場合、地域の誰がフットパスづくりの中心的役割を担うのかが曖昧になってしまうことが生じる。そのため、この東近江市の八日市コースの作成の事例からも分かるように、フットパスコースがあり、フットパスMapが完成していても、その取り組みが地域活性化にすぐさま直結せず、少しずつ下火になってしまうという状況が起こる。湖東地区で地域おこし協力隊員がフットパスコースづくりを行っていることも、同様の懸念があり、契約期間が満了した後、地域の誰が湖東地区のフットパスを地域に向けて定着させ、外部の方々が歩きに来てもらえるように情報を発信するのか、地域内での役割分担が明確でないという不安が存在する。フットパスに魅了された方が、個人的にフットパスづくりのための地域資源の発掘を行っているという「点」としての動きが始まったという状態であるように思える。これはコロナ禍の時代を経て、新たな東近江フットパスのリスタートの段階であろう。

一方、大分県臼杵市の場合は、課題としては地域内連携の体制づくりであるよう感じている。臼杵市内のフットパスコースは、地域の様々な資源をつなぎ合わせて線的な導線を確保しようという意図は強く感じられる。しかし、地区ごとの取り組みであり、やはり臼杵市全域で歩く人を歓迎するという明確な役割分担の下、一体的な取り組みとして臼杵フットパスがブランディングできているかどうかは、いささか疑わしい。臼杵フットパスには、臼杵フットパス研究会（旧臼杵市）とGT研究会（旧野津町）の2つの中心的なフットパスづくりの主体が存在している。美里フットパスがある美里町も、旧中央町と旧砥用町との合併によって新しく生まれた町ではあるが、美里フットパスと言えば、「棚田をはじめとする良好な田園景観」、「縁側カフェや軽トラカフェなどの地域の食文化を楽しめる機会」、そして何よりも「地域住民からの積極的な声掛け」という統一的なブランドイメージが存在する。臼杵フットパスはその統一的なブランドイメージの形成が今後の大きな課題となっており、上記した2つの研究会を中心に「地域の協力を得つつ」、線的なフットパスづくりに励んでいる段階であるといえる。

5.2 目指すべき美里フットパスの到達点

美里フットパスは「交流人口の増加」をある程度達成し、徐々に「交流人口を関係人口に」という段階に至っていると考える。地域を訪れた人たちを、地域のファンになってもらい、リピーターとなってもらったり、地域づくりの担い手となってもらったりするなど、

より地域との関係性を濃密にしていく取り組みを始めた。

具体的には、民泊の推進や縁側カフェの常設、里山遊びの体験メニューの充実などがそれにあたる。どれも美里町内の一般住民がそれらの担い手であり、これらの繋がりは美里フットパスづくりの中で形成されてきた新たなコミュニティである。地縁に限らず、旧中央町・旧砥用町の関係もなく、美里町全域で展開されているものである。美里フットパスづくりによって、繋がった商工会の人、農家、料理好きの主婦など、美里町に住む一般の方々が直接、フットパスを歩きに来た人と接点を持ち、交流を楽しんでいる。美里町産業連携協議会が軸となり、美里フットパスを歩きに来た人が、より美里での滞在時間を増やし、より美里町のファンになってもらうための取り組みを提供しているのである。この段階に至り、ようやく「フットパス式まちづくり」と呼べるものとなるのだろう。

フットパスを歩きに定期的に地域に外部者が訪れるようになると、地域側も日常的にその対応に適応するために、来訪者への対応に慣れていく。フットパスが地域の生活空間に入ってきても良いという地域側の意思表示である以上、来訪者は安心して地域内を散策できるのである。ここで「フットパス式まちづくり」が成功するための条件としては、日常的に地域社会に来訪者が来た際、地域社会側がそれを受容できる体制が確保されているかである。美里式フットパスの場合、日ごろやっていることを、来訪者が来ても「同じことを体験させてあげてください」とし、「一緒になって楽しんでくれれば良いから」ということを基本姿勢としている。まさに、フットパスの理念である「地域のありのままを楽しむ」ことを目指しているのである。歩く道だけでなく、ありのままの暮らしや地域文化を来訪者も共に関われる、参加できる取り組みはまさに関係人口を増加させるための、極めて有効な策であると考える。

以上のように、本稿においては、フットパスの先進地域である熊本県美里町と「美里式フットパス」を取り入れている大分県臼杵市、そして滋賀県東近江市の2つの地域を比較することによって、「フットパス式まちづくり」に必要な要素やその過程を明らかにすることができた。これからは、このフットパス式まちづくりのモデルを、特定の地域のみならず、日本の様々な地域において展開していくことで、本理論の汎用性をより高めていきたいと思っている。

謝辞

本研究は、公益財団法人サントリー文化財団2021年度研究助成「地域文化活動の継承と発展を考える」「関係人口の創造を通した地域文化の魅力再発見と継承の地域ネットワーク構築」(研究代表者:廣川祐司)と2021年度採択北九州市立大学特別研究推進費「エコツーリズム・グリーンツーリズムから『サステナブルツーリズム』へ」(研究代表者:廣川祐司)による研究成果である。また、コロナ禍が終息し得ていない時期に、本調査を受け入れて頂き、調査に協力して頂いた、美里フットパス協会の井澤るり子氏、民宿幸登里さん、民泊きつねのてぶくろさん、美里フットパス縁側カフェの皆様、東近江市の関係者の皆様、

臼杵フットパス研究会の皆様、吉四六さん村グリーンツーリズム研究会の皆様には、改めてお礼申し上げる。

参考文献

泉留維・廣川祐司（2018）「日本のフットパスにおけるウォーカーの志向について」,『専修経済学論集』第 52 巻第 3 号，pp.21-33.

神谷由紀子 (2014)『フットパスによるまちづくり 地域の小径を楽しみながら歩く』, 水曜社 .

川上友貴・田中尚人 (2014)「美里町フットパス事業に見る住民参加の進展に関する研究」,『第 50 回土木計画学研究・講演集』，pp.195-200.

塩路有子（2018）「英国におけるパブリック・フットパスと地域振興 -Walkers are Welcome タウンの活動 -」,『阪南論集 社会科学編』Vol. 51 No. 3，pp.213-221.

寺村淳（2015）「地域づくりにおけるフットパスの有効性とコーディネーターの役割に関する研究－熊本県美里町の『美里式フットパス』を事例として－」,『農村計画学会誌』34 巻，p. 219-224.

廣川祐司（2014）「フットパスの創造とツーリズム―熊本県美里町の地域づくりと生業の可能性」，三俣学編『エコロジーとコモンズ―環境ガバナンスと地域自立の思想』晃洋書房.

廣川祐司 (2014)「地域活性化のツールとしてのフットパス観光―公共性を有した地域空間のオープンアクセス化を目指して―」,『2013 年度 北九州市立大学都市政策研究所地域課題研究』，pp.59-75.

廣川祐司（2015）「フットパスによる地域創生のモデル化の試み―持続可能な発展における『開発』概念の再定位」，千葉大学経済学会『経済研究』29 巻 4 号，pp.509-543.

廣川祐司（2021）「『地域振興のためのフットパス観光』に取り組む地方公立大学の挑戦」,日本交通公社『観光文化』45 巻 3 号，pp. 50-53.

見舘好隆・廣川祐司・村江史年・内田晃（2016）「大学生が地域社会を変革する『地方創生モデル』の開発－地方都市におけるフットパス導入による地域活性化の事例を用いて－」, 京都大学高等教育研究開発推進センター『京都大学高等教育研究』22 巻，pp.11-19.

参考資料

NPO 法人大分県グリーンツーリズム研究会
（https://www.oita-gt.jp/%E5%90%89%E5%9B%9B%E5%85%AD%E3%82%B0%E3%83%AA%E3%83%BC%E3%83%B3%E3%83%84%E3%83%BC%E3%83%AA%E3%82%BA%E3%83%A0%E7%A0%94%E7%A9%B6%E4%BC%9A/），2021 年 12 月 13 日閲覧.

JTB 総合研究所「交流人口」,『観光用語集』

（https://www.tourism.jp/tourism-database/glossary/exchange-population/），2021 年 12 月 13 日閲覧.
総務省関係人口ポータルサイト「関係人口とは」
（https://www.soumu.go.jp/kankeijinkou/about/index.2html），2021 年 12 月 13 日閲覧.
美里町「美里町人口ビジョン」
（https://www.pref.kumamoto.jp/uploaded/attachment/22762.pdf），2021 年 12 月 13 日閲覧.
美里町「令和元年度 美里町産業連携協議会活動報告書」
（https://www.town.kumamoto-misato.lg.jp/dl?q=19181_filelib_76cad12d5cd0dedb25755f78edb62e7e.pdf），2021 年 12 月 13 日閲覧.
美里フットパス協会ホームページ（https://misatofp.jimdofree.com/），2021 年 12 月 13 日閲覧.
新しい地域づくりプロジェクト地域づくり＋美里ＣＯｃＣＡＲＵ（こっかる）プロジェクト（https://chiiki-plus.com/42/），2021 年 12 月 13 日閲覧.